関西大学学術リポジトリ
Kansai University Institutional Repository

景観と祭りからみた深江

著者	森 隆男
雑誌名	昔風と當世風
巻	92
ページ	1-6
発行年	2008-04-01
URL	http://hdl.handle.net/10112/1898

景観と祭りからみた深江

森　隆男

一　はじめに

海を隔てた高台から深江港と小高い丘の上にある神社の森を眺めたとき、二〇年ほど前に訪れた漁村の景観が甦った。よく似た地形の中に形成された景観に、同様の歴史を予感したのである。その漁村とは三重県尾鷲市に属する須賀利浦である。中世の史料に地名が残り、近世は南海路の風待ち港としても栄えた。

国東半島の付根に位置する大分県日出町深江の集落は、山と海の間の狭い平地に海岸と平行に二本の主要な道路が走り、これらに短く細い道が交差している。そして二本の道路の間と山側の道路に沿って、狭い敷地いっぱいに民家が建ち並んでいる。現在の深江の戸数は一一五戸、人口は三二九人で、生業別戸

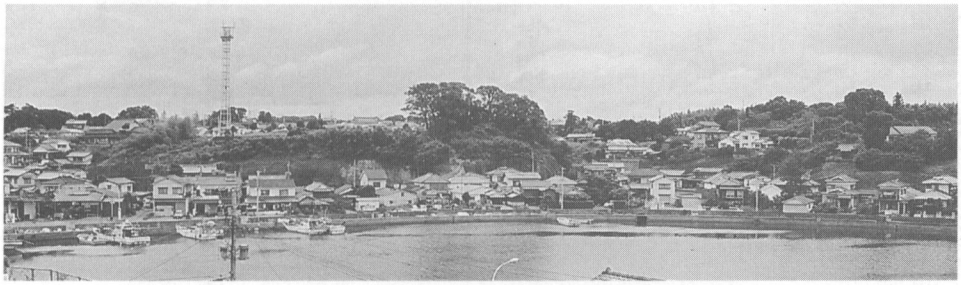

写真１　京泊からみた深江　中央の森は恵美須神社の旧鎮座地

数は農業九戸、漁業二〇戸、商業六戸その他である。農業はかつて藺草を栽培していたが、現在は梨を栽培している。漁業は打瀬網漁が中心である。

毎年十月の住吉神社の祭では、神輿の海上渡御が盛大に行なわれる。その様子を聞き書きしながら、私はかつての景観を復原し、そこで行なわれた祭礼を重ねたとき、現在とは異なる深江の歴史を知ることができるのではと思った。

二　景観の復原

現在の深江港は入り口付近の幅が約五〇〇メートル、奥行き約一キロメートルである。海岸に沿って護岸が施され、広い道路が整備されている。しかし近世までは、塩屋、東ノ江、江上の各小字は海で、陸地の奥深くまで海が入り込んだ天然の良港であった。当時の海岸線を示す石積の一部が残っており、その位置から判断して現在の家並みまで海が迫っていたことがわかる。すなわちかつての深江は、崖下の狭い平地に、一本の道をはさんで両側に家並みが続く細長い集落であった。港の西側最深部は戦後の埋め立てにより直線的な海岸線になり、比較的広い平地が出現した。以上のような情報をもとに埋め立て前の海岸線を推測し、景観上のポイントを記したのが図である。

景観上のポイントになるのは、住吉神社とその境内に設置された大型の常夜灯、恵美須神社、襟江亭、御旅所、イナ網組の網干し場などである。これらにより近代の深江の景観を具体的にイメージすることが可能になろう。

住吉神社は小字古城に鎮座し、中世まで城郭があったところである。貞享三年（一六八

写真２　かつての海岸線を伝える石垣

五）にかつて鎮座していた牧ノ内から戻された。境内には寛政八年（一七九六）に勧請した金比羅神社の社殿が建てられている。これは深江の沖で遭難した大坂の商人泉屋又兵衛が、藩主に願って寄進したもので、深江が諸国の廻船の風待ち港であったことを示している。住吉神社と金比羅神社はいずれも航海の安全を約束する神を祭神としている。ちなみに正徳年間（一七一一～一七一六）の旧記に「東西南北、風にかまわず船がかりよし、船数大小三百艘内外かかり申候」とあり、風待ち港として繁栄していた近世の様子をうかがうことができる。

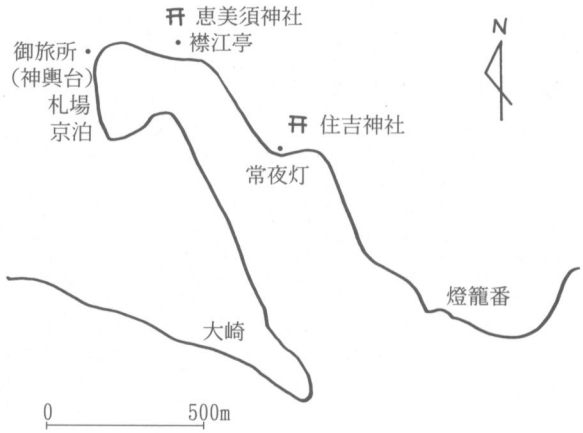

図　埋立前の深江地域海岸線

また住吉神社境内の海側に建立されている大型の常夜灯は、宝永八年（一七一〇）に日出藩主が寄進したもので、この地が高台にあり、海に突き出した地形であることから灯台の役割を果たしたと考えられる。同様に深江港の出入り口に位置する場所にも常夜灯が設置されていたという。小字名「燈籠番」は、その名残りであろう。

写真３　住吉神社境内の大型常夜灯

恵美須神社は、明治の「神社明細帳」によると上野仁兵衛と手嶋某により深江の浜に勧請され、後に藩主の許可を得て襟江亭の裏手にある丘の上に遷座したという。漁業神として勧請されたことは間違いなく、この場所が深江の集落を見下ろす中心にある点からみて、深江が漁村集落としての性格をもっていたことを示す重要な情報になろう。信徒六十五人という数字は明治における漁民の人数を示していると思われる。平成十三年に住吉神社の境内に遷座するまで鎮座していた

襟江亭は、寛文七年（一六六七）、藩主が参勤交代の際に使用する船の風待ちや潮待ちのために建築された平屋建ての建物である。伊能忠敬が地図作成のため当地に立ち寄った際にも使用された。現在は荒廃が著しく、保存に向けての方向性は出されていない。深江が港町であったことを伝える貴重な遺構であり、残念である。

港の最深部に、鰯網漁に使用した網干し場が設けられていた。漁民十七人が組を作って漁業権をもち、昭和二十六年まで、岡引きで鰯の子であるイナを獲っていた。イナは「年取り魚」として正月前に需要があったという。

三　祭礼からみた深江

深江を代表する祭礼が、十月の第二日曜に

行なわれる住吉神社の例祭である。かつては九月二十七日と二十八日が祭日であった。この祭礼には深江のほか日比浦、高尾、三尺山など七集落の氏子約五百戸が参加した。

早朝に住吉神社を出発した神輿は、陸路、牧ノ内や上深江などを経由して糸ヶ浜の住吉元宮社に向かう。使用する道は、以前から変わらないという。住吉元宮社で神輿を安置して神事が行なわれる。昭和三〇年ごろまで浜の前の海中で神輿の練を行なった。

そのあと先導船、神輿船、供船の順に船渡御が始まる。先導船は、船首で水をまきながら進む。また神輿船は新造船を優先的に使用する。供船では毛槍の演舞や獅子舞が舞われる。また子供たちが赤布を巻いた竹を持って乗り込む「鉄砲船」も参加する。これらの船は、現在は機械船であるが戦前までは櫓で漕いだ。イワシアグリ網漁に使用する漁船など六艘が使用された。渡御のコースは燈籠番の沖を経て、さらに日比浦の沖まで進んで引き返し、昼ごろ深江港に入る。ただし、日比浦の沖まで行ったのは戦前から戦後にかけての一時期だけであった。

御旅所前の海で神輿船は右回りに三回旋回したあと上陸し、神輿台に安置される。ここで神輿に対し神饌が供えられる。神輿台のあるところはかつて島で、約三〇年前に埋め立てられた。しかしその位置は、変更されることなく現在に至っている。昼食と休憩のあと、夕方になって神輿は深江の集落内を貫く道を通って本社に還御する。

この祭礼の起源について、江戸での滞在を終えて帰藩する藩主の御座船を迎えた様子を再現したとする説や、大漁旗を掲げて帰港する漁船を真似たとの説がある。しかし起源を明らかにする資料は無いようである。私は、この祭礼は住吉神社の例祭として執行されているが、恵美須神社に関わる信仰が大きな影響を与えていると考えている。理由は次の二点である。

写真 4　船渡御（佐藤裕一郎氏提供）

写真 5　御旅所の神輿台

まず神輿台が据えられている御旅所は、かつて住吉神が漂着したところとの伝承がある。神霊が顕現したところを御旅所とする事例は各地にみられるが、漂流死体をエビスとも呼ぶように漂着伝承を伴う事例は恵美須神社に多い。前述した恵美須神が最初に勧請された浜とは、神輿台付近を指すのではなかろうか。

また御旅所に上陸する前に神輿船が右回りに三回旋回するが、この理由は港に帰ったこ

とを示すためと説明される。しかし同様の事例は各地の漁民の祭礼でみることができる。たとえば岡山県笠岡市飛島には「七浦七戎」と呼ばれるように集落ごとに七か所の戎神社が祀られている。氏神の島神社の夏祭りでは、このうち上陸をしない五か所の戎神社の沖で神輿船が三回旋回する。飛島では旋回の理由について、戎神社に対し敬意を表現する行動ととらえられている。深江の場合も同様に理解すべきで、旋回して敬意を表す対象は恵美須神社と思われる。

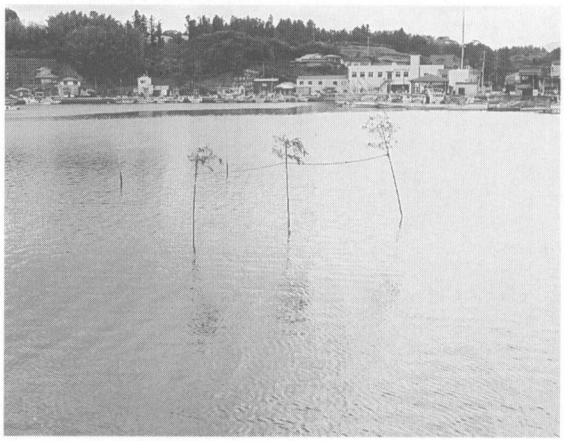

写真6　竜神祭祀の風景

以上のように、この祭礼の実態は恵美須神社に関わる漁民の祭礼であり、深江が漁業を中心に繁栄していた時代の痕跡を伝えるものと考えていいのではなかろうか。次に紹介する年中行事も、これを裏付けるものであろう。

七月十五日（旧暦六月十五日）に竜神祭りが行なわれる。岸の近くに四本の竹を立て、注連縄を張って竜神を祀る。かつては御旅所付近の道に沿って十基ほど祠が並んでおり、漁民がそれらに灯をともした。この祭りは水難に遭わないために行なう。

十二月に行なわれる恵美須神社の祭礼は、現在、深江の住民すべてが参加するが、以前は漁民だけで営まれた。神職による神事が執行され、鯛や野菜が神饌として供えられる。この日は豊岡から十人程度の神楽師を招き演じてもらった。また昭和二十五年までは相撲も行なわれた。これらもまた漁民の祭礼である。

四　港町深江の再現

前出のように近世中期に、深江港に出入りする船の数が大小合わせて三〇〇艘にのぼった。そして深江港には日出港とともに、諸国から入港する廻船と商品の価格を取り調べ、価格を差配する「問」がおかれた。問には船員たちの宿泊を斡旋する役割もあった。ちなみに深江港でその任に当たったのが伏見屋の屋号をもつ鈴木氏である。魚谷修三氏が作成した深江の屋号一覧表によると、廻船問屋の岩井屋や、宿屋の京泊など約三〇軒がみえる。これらはかつて港町であった深江の歴史を伝える貴重な資料である。近代に入っても繁栄は続いていた。明治十二年当時、深江港に入港した船の数は三一〇艘である。しかし、その後、機械船が普及するに及び、風待ち港としての役割を終えることになる。

現在の深江には半農半漁の生業が伝承されている程度である。住まいは深江に建てるが、田畑は上深江にあったという。漁民は必要に応じて農民を雇い、操業したという。大正に実施された漁村調査の結果によると、この地域の漁村は深江のほか牧ノ内、軒ノ井の三ヵ所だけで、計一五二戸の漁家があり、そのうち専業は一七戸だけである。一割程度の専業率は確かに低いが、一五二戸という魚家の数には留意する必要がある。かつてこの付近は鰯の好漁場であった。網元のもとで多くの漁民が活動する比較的豊かな漁村であったと思われる。恵美須神社の創建を願い出た前出の二人も網元もしくは有力な漁民であった可能性が高い。資料によると大正当時、鰯囲刺網や鰯船曳網、打瀬網で、鰯や背黒鰯、鯛、海老などを獲っていたことがわかる。

前出の屋号一覧表の中に、「網屋」があることに注目したい。瀬戸内海地域では漁業技術の伝播がきわめて早かったことが指摘されている。効率の高い漁具に対して出費を惜しまなかったのが漁民であった。深江に網屋が営業していたことはこの地で本格的な漁業が行なわれたことを示している。

五　景観と祭礼に残る歴史の記憶

かつて船で深江港に入ってきた人はどのような景観を目にしたのだろうか。仮想的に再現してみよう。別府湾を進んできた船は楔形に開いた深江港に入る。港の入り口あたりは比較的広いが、住吉神社の常夜灯を右手に見るころは、海の幅は急に狭くなり三百メートルほどである。高台にある常夜灯に対し、海面近くには集落の家々が続く。集落の中ほどの裏手に丘があり、こんもりと樹木が茂っている。恵美須神社の森である。漁民にとって、この森は住吉神社の森とともに操船上の目印となり、深江に帰ってきたことを実感させるものであった。とくに夜間は、住吉神社の境内に設置された常夜灯の明かりが重要な目印になったはずである。現代の灯台のような照度とは比べようもないが、鋭い視力をもった漁民には有効であったと思われる。丘の下にある大型の瓦葺の建物は襟江亭である。港の奥には祭礼の際に渡御してきた神輿を置く石の台が白く光っている。その周辺には網を干した砂浜が広がる。

現在の深江は、漁民の住まいや網干し場などは無く、湾内の奥に位置する静かな集落である。しかし近世の深江は現在とはまったく異なる集落であったことになる。つまり漁船や諸国の廻船が港を埋める港町であった。「札場」や「京泊」の地名はその名残りである。他国から流れてきた遊女と男の心中伝説もまた同様である。

以上のように考えると、第三節で取りあげた住吉神社の祭礼が、漁民の祭礼であったことも理解できる。景観と祭礼、竜神信仰の中に、かつての集落の記憶が伝承されているといえよう。

本稿の執筆に当たっては日出町立萬里図書館の野崎一郎館長から貴重な情報を提供していただいた。また魚谷修三氏が作成された深江の屋号一覧表も、大変貴重な資料になった。そして地元の皆さんが語ってくださった情報の重さを痛感している。まさに歴史の重さである。心よりお礼を申し上げたい。

参考文献

・『日出町誌』本編、史料編　一九八六
・河野通博『光と影の庶民史』古今書院　一九九一
・森隆男「飛島の豆祭り見学記」『昔風と當世風』第八十四号　二〇〇三